

(電子メール施行)
農技第 1485 号
令和4年8月16日

関係機関長 様

兵庫県病虫害防除所長

令和4年度病虫害発生予報第4号を發表します。

令和4年度病虫害発生予報 第4号

向こう1か月の病虫害発生予想

作物名	病虫害名	発生予想	発生現況
イネ	いもち病(穂いもち)	平年並(一部 やや多)	やや少
	紋枯病	平年並	やや少
	縮葉枯病	やや多	平年並
	細菌性病害 (もみ枯細菌病・内穎褐変病)	やや多	—
	ヒメトビウンカ	やや多	平年並
	ツマグロヨコバイ	平年並	やや少
	トビイロウンカ	やや少	少
	斑点米カメムシ類	やや多	やや多
	イネツトムシ	やや少	やや少
	コブノメイガ	やや少	やや少
ダイズ	立枯性病害	やや多	平年並
	べと病	平年並	やや少
	葉焼病	平年並	少
	ハスモンヨトウ	平年並	少
	ハダニ類	やや多	平年並
	吸実性カメムシ類	やや多	平年並
ナシ	黒斑病	やや多	やや多
	黒星病	やや少	やや少
野菜共通	ハイマダラノメイガ	多	やや多
	ハスモンヨトウ	やや多	平年並
	シロイチモジヨトウ	やや多	やや多
果樹共通	果樹カメムシ類	多	多

* 気象の概況

近畿地方 1か月予報

(8月13日から9月12日までの天候見通し)

令和4年8月11日
大阪管区气象台 発表

<予想される向こう1か月の天候>

近畿地方 1か月予報(08/13~09/12)		
2022年08月11日14時30分 大阪管区气象台 発表		
特に注意を要する事項	なし。	
向こう1か月 08/13~09/12	天候	平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
	気温	平均気温は、高い確率60%です。
	降水量	降水量は、近畿日本海側で平年並または多い確率ともに40%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。
1週目 08/13~08/19	気温	1週目は、高い確率60%です。
2週目 08/20~08/26	気温	2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。
3~4週目 08/27~09/09	気温	3~4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)			
気温	近畿地方	向こう1か月 08/13~09/12	
		1週目 08/13~08/19	
		2週目 08/20~08/26	
		3~4週目 08/27~09/09	
降水量	近畿太平洋側	向こう1か月 08/13~09/12	
	近畿日本海側	向こう1か月 08/13~09/12	
日照時間	近畿地方	向こう1か月 08/13~09/12	

■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

* 発生概況及び防除対策上の留意点

イネ

1 【いもち病】（穂いもち）

- (1) 予報の内容 発生量：平年並（一部やや多）
(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の現地圃場での葉いもちの発病株率は1.3%（平年値3.7%）で、早期水稲での発生圃場率は8.3%（同16.8%）、普通期水稲では3.1%（同19.8%）の発生が確認されている。8月上旬の場内圃場（加西市）でも、発病株率8.6%（平年値60.6%）とやや少ない発生が確認されている。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は多い、日照時間は少ない～平年並と予想されており、本病の発病にやや助長的である。上位葉に葉いもちが多発した場合は高い確率で穂いもちが発生するので、多発した地域では特に注意する。

- (3) 防除上の留意点

ア 本病の常発地、谷間^{あい}や山陰^{かげ}など日陰になりやすい圃場などは特に注意が必要である。このような圃場や葉いもちの病斑が上位葉にみられた圃場では、穂いもちの発生に留意し、状況に応じて薬剤散布を実施する。

イ 薬剤散布を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針等を参考に薬剤を選定し、農薬使用基準を守ること（<http://www.nouyaku-sys.com/nyaku/user/top/hyogo>）。

2 【紋枯病】

- (1) 予報の内容 発生量：平年並
(2) 予報の根拠

ア 8月上旬の場内圃場（加西市）で発生は確認されていないが、現地圃場でわずかに発生が確認されている。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は多いと予想されている。今後、イネの生育が進むに伴い、株内及び株間の湿度が高くなり、発病に好適になると考えられる。

3 【縞葉枯病】

- (1) 予報の内容 発生量：やや多
(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の現地圃場では発病株率1.4%（平年値0.8%）、普通期水稲の発生圃場率12.5%（同8.0%）と平年並の発生が確認されている。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いとされており、本病を媒介するヒメトビウンカの増殖が進むことから、本病の発生はやや多くなると考えられる。

ウ 今年度の第1世代虫（コムギ採集個体）のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の調査

結果については、兵庫県病害虫防除所ホームページを参考にすること (http://bojo.hyogo-nourinsuisangc.jp/wp/wp-content/uploads/2022/07/ヒメトビ保毒虫検定結果発表用_2022.06.pdf)。

(3) 防除上の留意点

- ア 普通期栽培では今後の感染を防止するために、現在発病が目立つ圃場では本田防除を実施すること。
- イ 薬剤散布を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針等を参考に薬剤を選定し、農薬使用基準を守ること (<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/hyogo>)。

4 【細菌性病害】 (もみ枯細菌病・内穎褐変病)

(1) 予報の内容

発生量：やや多

(2) 予報の根拠

- ア 本病の主要な感染期間は出穂期から出穂2、3日後までの短い期間であり、このころの高温・多湿条件に遭遇しやすい普通期の品種では発生しやすい。
- イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は多いと予想されており、本病の発生が助長され、やや多い発生になると考えられる。

(3) 防除上の留意点

- ア 本病は籾のみに発生する難防除病害であり、発生後の防除は困難である。本病は籾の開花直後に感染するため、出穂期直前から開花期までの薬剤散布が望ましい。
- イ 薬剤散布を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針等を参考に薬剤を選定し、農薬使用基準を守ること (<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/hyogo>)。

5 【ヒメトビウンカ】

(1) 予報の内容

発生量：やや多

(2) 予報の根拠

- ア 加西市(農技センター内)における8月上旬のすくい取り調査(10回振り)では成虫3.0頭(平年値9.8頭)、幼虫12.0頭(同30.2頭)、同時期の朝来市(北部農技内)では成虫9.0頭(同23.7頭)、幼虫44.0頭(同36.3頭)であった。また、現地圃場では広い地域で発生が確認されており、発生圃場率は早期水稻で35.4%(同33.8%)、普通期水稻で31.3%(同29.9%)であった。
- イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いと予想されており、本種の増殖に好適な条件となり、やや多い発生になると考えられる。

(3) 防除上の留意点

- ア 本種はイネ縞葉枯病を媒介する。現在、発病株が目立つ圃場ではウイルス保毒虫が増加し、翌年の多発につながるおそれがあるので、今後の基幹防除や収穫後の耕うん等で、本種の密度を下げておくことが重要である。
- イ 薬剤散布を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針等を参考に薬剤を選定し、農薬使用基準を守ること (<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/hyogo>)。

6 【ツマグロヨコバイ】

- (1) 予報の内容 発生量：平年並
- (2) 予報の根拠
- ア 予察灯における7月の合計誘殺数は、加西市（農技センター内）で5.0頭（平年値87.0頭）、南あわじ市（淡路農技内）で30.5頭（同32.6頭）、朝来市（北部農技内）で2.0頭（同8.4頭）とやや少ない。
- イ 8月上旬の場内圃場（加西市）でのすくい取り調査（10回振り）では成虫2.0頭（同23.4頭）、幼虫3.0頭（同52.8頭）とやや少ない発生が確認されている。
- ウ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いと予想されており、本種の増殖に好適な条件となり、平年並の発生になると考えられる。

7 【トビイロウンカ】

- (1) 予報の内容 発生量：やや少
- (2) 予報の根拠
- ア 県下3か所に設置している予察灯への誘殺はまだ確認されていない。また、8月上旬の場内圃場（加西市、朝来市）及び現地圃場でも発生は確認されていない。
- イ 海外飛来性である本種は気流によって、中国大陸から飛来する。同じく気流で飛来するセジロウンカは、現地圃場で平年並の発生が見られている。
- ウ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いと予想されており、秋にむけて増殖が進み、発生が見られるようになると考えられる。

8 【斑点米カメムシ類】

- (1) 予報の内容 発生量：やや多
- (2) 予報の根拠
- ア 県下3か所に設置している予察灯におけるカスミカメムシ類の7月の合計誘殺数は、加西市（農技センター内）で196.3頭（平年値532.2頭）、南あわじ市（淡路農技内）で291.4頭（同568.0頭）、朝来市（北部農技内）で72.4頭（同131.8頭）であった。また、ミナミアオカメムシやイネカメムシは例年より早い6月下旬から誘殺が続いている。
- イ 7月下旬の現地圃場では、出穂の有無にかかわらず本田で発生が確認されている。
- ウ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いと予想されており、斑点米カメムシ類の増殖に好適な条件となるため、今後の発生に注意すること。
- (3) 防除上の留意点
- ア 出穂期までに生息場所である圃場周辺（畦畔等）の除草を行い、生息密度の低下を図ること。ただし、出穂直前と出穂後の畦畔除草は、水田へのカメムシ類の侵入を助長するので避けること。また、イネカメムシの対策については、令和4年度病害虫発生予察防除情報第4号（令和4年7月29日付）を参考にすること（HPに掲載）。
- イ 農薬散布は出穂期以降に実施すること。
- ウ 薬剤散布を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針等を参考に薬剤を選定し、

農薬使用基準を守ること (<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>)。

9 【イネツトムシ】

- (1) 予報の内容 発生量：やや少
(2) 予報の根拠

ア 8月上旬の場内圃場(加西市)及び現地圃場でわずかに発生が確認されている。
イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いと予想されているが、今後、イネの生育状態が進むにつれて、本種の加害好適期が過ぎるため、やや少ない発生のまま推移すると考えられる。

10 【コブノメイガ】

- (1) 予報の内容 発生量：やや少
(2) 予報の根拠

ア 県下3カ所に設置している予察灯への成虫の飛来は確認されていないが、8月上旬の場内圃場(加西市)ではわずかに幼虫の発生が確認されている。
イ 本種はセジロウンカなどと同様に海外から飛来する。収穫期まで幼虫の加害は続くので、今後も発生に注意する。

ダイズ

1 【立枯性病害】

- (1) 予報の内容 発生量：やや多
(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の現地圃場では発病株率0.2%(平年値0.2%)、発生圃場率12.5%(同8.9%)と平年並の発生が確認されている。
イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は多いと予想されている。本病は圃場の土壌水分が高くなることで発病するので、やや多い発生になると考えられる。

- (3) 防除上の留意点

ア 本病は圃場の排水不良で助長されるため、圃場の排水促進に努める。
イ 被害株は、次年度以降の感染源になるため、圃場外に持ち出し適切に処分する。
ウ 薬剤散布を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針等を参考に薬剤を選定し、農薬使用基準を守ること (<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>)。

2 【べと病】

- (1) 予報の内容 発生量：平年並
(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の現地圃場では発病株率0.2%(平年値1.3%)、発生圃場率4.2%(同10.3%)とやや少ない発生が確認されている。
イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は多いと予想されている。降雨による多湿で、本病の発生が助長され、平年並の発生になると考えられる。

3 【葉焼病】

- (1) 予報の内容 発生量： 平年並
- (2) 予報の根拠
- ア 場内圃場（加西市）および現地圃場とも発生は確認されていない。
- イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いと予想されている。本病は高温性の病害であるため、気温の上昇により発病が助長され、平年並に発生すると考えられる。

4 【ハスモンヨトウ】

- (1) 予報の内容 発生量： 平年並
- (2) 予報の根拠
- ア 場内圃場（加西市）および現地圃場とも白変葉及び幼虫の発生は確認されていない。
- イ これから本種の最盛期を迎えるので、白変葉及び幼虫の発生に注意が必要である。
- ウ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いと予想されており、本種の増殖に好適な条件となり、平年並の発生になると考えられる。

5 【ハダニ類】

- (1) 予報の内容 発生量： やや多
- (2) 予報の根拠
- ア 8月上旬の場内圃場（加西市）の調査では白大豆で10株あたり12.0頭(平年値4.2頭)の発生が確認されている。
- イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いと予想されており、本種の増殖に好適な条件となり、やや多い発生になると考えられる。
- (3) 防除上の留意点
- ア 薬剤散布を行う場合は、薬液がハダニ類の生息している葉の裏に十分かかるように行うこと。
- イ 薬剤散布を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針等を参考に薬剤を選定し、農薬使用基準を守ること (<http://www.nouyaku-sys.com/nyaku/user/top/hyogo>)。

6 【吸実性カメムシ類】

- (1) 予報の内容 発生量： やや多
- (2) 予報の根拠
- ア 場内圃場（加西市）で発生は確認されていないが、7月下旬の現地圃場では発生圃場率54.2%（同14.1%）であった。
- イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いと予想されており、カメムシ類の活動が活発になり、やや多い発生になると考えられる。
- (3) 防除上の留意点
- ア 着莢期に成虫が飛来し、吸汁や産卵をする。成虫は好適な餌がある場所を求めて移動するが、卵からふ化した幼虫はそのまま滞在し、黄熟期まで加害し続ける

ため、薬剤散布は着莢期から10日間隔で2～3回実施する。

イ 薬剤散布を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針等を参考に薬剤を選定し、農薬使用基準を守ること (<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>)。

ナシ

1 【黒斑病】

(1) 予報の内容 発生量：やや多

(2) 予報の根拠

ア 8月上旬の場内圃場（朝来市）及び現地圃場では、短果枝の発病葉率7.3%（平年値6.0%）、発生圃場率100%（同66.7%）で、発育枝の発病葉率1.8%（同2.9%）、発生圃場率60.0%（同53.3%）とやや多い発生が確認されている。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は多いと予想されており、本病に好適な条件が続くことから、やや多い発生のまま推移すると考えられる。

2 【黒星病】

(1) 予報の内容 発生量：やや少

(2) 予報の根拠

ア 8月上旬の場内圃場（朝来市）及び現地圃場でわずかに発生が確認されている。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高く、降水量は多いと予想されている。黒斑病に比べ、本病は高温に好適でないため、やや少ない発生のまま推移すると考えられる。

野菜共通

1 【ハイマダラノメイガ】（アブラナ科野菜）

(1) 予報の内容 発生量：多

(2) 予報の根拠

ア 加西市（農技センター内）で実施している誘致植物^{※1}（クレオメ）での調査では、7月以降、寄生花枝率^{※2}は増加傾向を示しており、7月下旬の寄生花枝率は51.9%（平年値15.8%）と多発年であった昨年（47.0%）とほぼ同等で、その後も平年より高い状態が続いている。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いと予想されており、本種の増殖に好適な条件となり、多い発生になると考えられる。

ウ 本種の発生状況の詳細については、令和4年度病害虫発生予察注意報第2号（令和4年8月12日付）を参考にすること（HPに掲載）。

※1 対象とする害虫が好む植物で、発生状況を調べるために用いられる。

※2 クレオメは頂部に花が咲く分枝（花枝）を連続して展開する。ハイマダラノメイガの発生予察では、この花枝を調査単位としている。

(3) 防除上の留意点

ア 本種はアブラナ科野菜を特異的に加害する。

イ 発生盛期である8月中旬～9月下旬頃に育苗や播種・定植をする場合は、本種による加害が起こることを前提とした防除に努める。

ウ 幼虫が生長点を加害するため被害が大きく、被害を確認してからの防除では手遅れとなるため、育苗期や定植直後の予防的防除に努める。

エ 播種・定植時や育苗期に、粒剤や灌注で薬剤処理をした場合でも、その後の被害発生に注意する。天候等の条件により期待した防除効果が得られないこともあるので、本圃での薬剤防除の準備をしておくことが望ましい。

オ 薬剤散布を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針等を参考に薬剤を選定し、農薬使用基準を守ること (<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>)。

2 【ハスモンヨトウ】

(1) 予報の内容

発生量：やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月2半旬～8月2半旬までのフェロモントラップの合計誘殺数は、加西市（農技センター内）で440.2頭（平年値483.2頭）、南あわじ市（淡路農技内）で127.9頭（同112.1頭）であった。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いと予想されており、本種の増殖に好適な条件になることと本種の発生最盛期を迎えるため、今後定植される野菜類での被害の発生に注意が必要である。

(3) 防除上の留意点

ア ピーマン、ナス、キャベツ、レタスをはじめ多くの野菜類を加害する。

イ 卵塊や集団でいる若齢幼虫を見つけたらすみやかに捕殺する。

ウ 中齢以降の幼虫には、薬剤による防除効果が低くなるので、早期発見に努め若齢期の防除を徹底する。

エ 薬剤散布を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針等を参考に薬剤を選定し、農薬使用基準を守ること (<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>)。

3 【シロイチモジヨトウ】

(1) 予報の内容

発生量：やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月1半旬～8月2半旬までのフェロモントラップの合計誘殺数は、加西市（農技センター内）で193.0頭（平年値69.9頭）、南あわじ市（淡路農技内）で690.9頭（同252.0頭）であり、平年よりやや多い状態で推移している。また、一部の野菜・花卉類で幼虫の発生が見られ始めている。

イ 今後の1か月予報によると、気温は平年より高いと予想されており、本種の増殖に好適な条件になるため、今後は野菜類全般での被害の発生に注意が必要である。

(3) 防除上の留意点

ア 本種の加害植物は、ネギをはじめキャベツ、ピーマン、ナス、レタス等、多くの野菜類のほか、豆類、花き類など広い範囲に及ぶ。

イ 本種は茎葉の柔らかい部分を好んで食害する性質があり、定植直後の被害には特に注意すること。

ウ 薬剤散布を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針等を参考に薬剤を選定し、

農薬使用基準を守ること (<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>)。

果樹共通

1 【果樹カメムシ類】

(1) 予報の内容

発生量：多

(2) 予報の根拠

ア チャバネアオカメムシ等果樹を加害するカメムシ類の発生量には隔年性があり、本年は表年（発生の多い年）に該当する。7月のフェロモントラップ（チャバネアオカメムシ）の合計誘殺数は、加西市（農技センター内）で656.5頭（表年平均369.2頭）、朝来市（北部農技内）で1547.4頭（同334.2頭）であり、7月に入ってからも多い状態が続いている。

イ 今後1か月予報によると、気温は平年より高いと予想されており、8月以降は次世代成虫の出現期を迎えることから、ナシ、カキ、ブドウ等の果実への被害の発生に注意が必要である。

ウ 本種の発生状況の詳細については、令和4年度病害虫発生予察注意報第1号（令和4年8月12日付）を参考にすること（HPに掲載）。

(3) 防除上の留意点

ア 発生状況は地域や園地で異なるため、園地の見回りを実施し、発生や被害を認めたら速やかに防除する。

イ 薬剤散布を行う場合は、病害虫・雑草防除指導指針等を参考に薬剤を選定し、農薬使用基準を守ること (<http://www.nouyaku-sys.com/noyaku/user/top/hyogo>)。

* この情報は、兵庫県病害虫防除所ホームページに掲載
(<http://bojo.hyogo-nourinsuisangc.jp/>)

2022年3月1日より「兵庫県病害虫防除所」Twitterを開設しました！
発生予察情報など病害虫に関する情報を提供しますので、是非フォローお願いします。
Twitterアカウント(http://twitter.com/hyogo_boujoshou)

